

私の場所

今生康宏

「ふふー、今日はお家デートだ」

「いや、ただ遊びに来ただけだろ」

「そうとも言うかな？」

「そうとしか言わないって」

俺とさくらは幼馴染と言っても、しっかりと家族ぐるみでの付き合いがあつたというほどではないから、互いが家に遊びに来るようなことはほとんどなかった。

まあ、小学生の内ぐらいはあつたと思うが、中学に上がれば他の多くの男女がそうであるように、かつてほど別け隔てなく触れ合うということはなくなつていった。……まあ、俺が一方的に離れようとしていたところはあると思うけど。

後、中学時分にはもう、俺が完全にはみ出し者みたいになつていたから、俺が親しくすることであいつまで不良の仲間と思われてほしくなかった、という気持ちもある。いや、俺は別に不良でもヤンキーでもないつもりなだけだ。勝手に番長みたいな扱いになつていたのは事実だし。

「なんか懐かしいねー、こういう感じ」

「まあな」

ということで、俺たちは実に小学校以来となる、互いの家に遊びに行くという交友関係を復活させていた。

まあ、付き合い始めたんだから自然なことだ。ただ、休日俺がゲームをしているところにさくらがやってきただけだから、これをデートと呼ぶにはあんまりだろう。さくらはゲームとかやらないから、一緒に遊ぶという訳でもないし。

「お前、人がゲームやってるの見てて面白いのか？」

「面白いよー。コー君見るの」

「言つとくけど、俺は無難に上手いからな。特に面白いところとかないぞ」

俺がやっていたのは、いわゆるオープンワールドのオンラインゲームだ。最近割と流行ってるゲームで、別にゲーム好きじゃなくても知っている。俺もそこまでゲーマーってつ訳じゃないし。

パソコンを含め、様々なハードで展開しているが、俺がやっているのは据え置きゲーム機の一つだ。そのため、テレビにつないで座布団の上に座りながらやっている。

ややアクションが激しめではあるが、難易度自体はそう高くないし、俺が進めていたのもやり損ねていたクエストの消化だから、苦戦する要素もない。観客としてはつまらない状況とは

思うが、さくらを喜ばせるために難しいところに挑戦するというのも、何か違う気がするしな。ということで、あぐらをかいて鼻歌まじりに進めていると、さくらは隣でふわふわと前後に揺れている。

一応、BGMとかにノッてるのか？明らかに動きがそれよりスローだけど。

「見ててわかるのか？」

「うん。コー君が楽しんでるなーって」

「……そうか」

さくらの方を見ると、ばつちり視線が合った。完全にテレビ画面じゃなく、俺を見ていたらしい。

それを平然と、当たり前のことであるかのように言うものだから、照れるよりも先に納得させられてしまった。

……さくらは、今までもずっとこんな感じだったんだろうか。俺のやっていることや、その結果の評判じゃなく、俺だけを見ていて。だから、ずっと俺の傍にいて。

「ね、コー君。もつと近く行っていない？」

「いいけど……もう十分、近いだろ」

「えへへー、ここ空いてるよー」

「えっ？」

そう言って立ち上がったさくらは、俺の前にまでやってきて……そのまま、俺のあぐらの中にぽすん、とお尻を埋めた。

いや、いくらさくらが小柄だからって、普通に邪魔だし暑苦しいんだけど。

「この密着状態でゲームをやれって？」

「コー君、上手いからできるでしょー」

「……なんかお前、最近無茶言うようになったよな。生意気っていうか、なんていうか」

「そうかな？」

本当に自覚はないんだろうな。

なんというか、これも恋人になったからこそその変化、だろうか。お互い。特にさくら側からの接し方に遠慮がなくなった気がする。

さくらがやりたいようにやって、それを俺が仕方なく受け入れて。たまに、さくらは俺が許すラインを探っているんだろうか？と思ったりもするが、そもそも俺は大体のことを許すから、駆け引きにすらなっていない。

「ほら、さくら。コントローラーが遠いから、ちよつと脇を締めてやるぞ」

「ふわーっ、コー君近いよお」

俺も反撃とばかりに、ぎゅつとさくらを抱きしめるようにしてやる。

さくらの頭が俺の顎の下辺りにあるから、抱き寄せるとそこから甘い……上品な香りが漂っ

てきた。

シャンプーの匂いだろうか。それ以前に、さくらは妙に甘い匂いがするから、さくら自身の匂いなのかもしれない。

なんて、心地いい香りに浸っていると、さくらが俺の方にもたれかかってきた。

「ふふー、コー君の胸板、でつかくてたくましー」

「お前の背中が小さいんだよ。ホント、いつまでもちっこいな」

「ちっちゃくないよー」

「いや、ちっちゃいだろ」

「おつきいよ？コー君の大好きなのは♪」

そう言うのと、さくらは俺のあぐらの中でくるっ、と回転して俺の胸に、自分の胸を押し付けてきた。

その表情は、思わず息を吞んでしまうような大人びたもので。

「コー君、いつまでも私が子どもだと思ってるでしょー」

「……子どもだよ。そう言ってる内はな」

「え、そうかな？」

焦ったような若い表情に戻ったさくらは、やっぱりいつも通りだった。けど、さくらは間違いなく大人の一面を持っている。

だからこそ俺は、さくらを女として意識してしまうんだろう。別に胸だけじゃなく……しつかりと大人の女としての魅力を持っているから。

「ほら、さっさとあっち向けて。いつまでもマヌケ面見せてると、唇塞いじまうぞ？」

「えへへー、いいよーっ」

「いいからさっさと戻れ。ここがお前の特等席だろ」

無理やり反対を向かせて、俺はゲームに戻っていった。

私の場所

2021年 8月11日 初版

奥 付

著者 今生康宏
URL <https://wedgewhite.com>
E-Mail konjyoyasuhiro@gmail.com

本書の無断複製、複写、転載を禁止します。

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

(<http://tokimi.sylphid.jp/>)